

機関番号：18001
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20530861
 研究課題名（和文） 「ゆさぶり」と「討議」による道徳授業の実践モデル開発に関する研究
 研究課題名（英文） A Research of Development of the Practical Model of Moral Lessons Based on “Shaking up” and “Discourse”
 研究代表者
 上地 完治（UECHI KANJI）
 琉球大学・教育学部・准教授
 研究者番号：50304374

研究成果の概要（和文）：

道徳授業に子どもたちが主体的に取り組むために、教師の発問による「ゆさぶり」と、「討議」を重視した道徳授業モデルが有効である。その際、話し合いの段階を徐々に高めていくことが必要である。また、真理を教えるというスタンスではなく、「コミュニケーション当事者の合意によって成り立つ」という発想が授業者にとって必要不可欠となる。

研究成果の概要（英文）：

To constitute moral lessons in which children engage with their moral tasks as their own and think seriously, it is effective use teacher's questions of shaking up children's idea, and making "discourse" the center of the lesson. In such a moral lesson, teachers need to make discussion deeply and concentrating children's thinking on theme. It is also indispensable for teachers to think that they do not teach moral values but moral values are legitimated by the consensus of the member of discussion.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2009年度 | 300,000 | 90,000 | 390,000 |
| 2010年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |

研究分野：道徳教育・教育哲学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：道徳教育、モラルジレンマ、討議、ゆさぶり、合意、可謬主義、社会構成主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 小・中学校の道徳の時間では、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成することが目標とされている。だが、たとえば「嘘

をついてはいけない」といった道徳的価値が表面的で単純な知識として児童・生徒たちに提示されると、彼らはそれを考えることなく、あくまでも道徳の授業の「知識」として受け

入れ、その結果、彼ら自身の現実の問題として捉えてこなかったのではないだろうか。つまり、道徳授業で取り扱う課題に「リアリティ」をもって、そして自分のこととして真剣に考え、他者と吟味することで、その課題に主体的に関われる道徳授業づくりが今求められている。道徳教育に対するこのような要請は、2006年度の教育基本法改正において規範意識の育成が強調されたことから明らかである。

(2) このような要請に対して、本研究では「ゆさぶり」と「討議」によって応えようと試みた。「ゆさぶり」については、資料によるゆさぶりと教師の発問によるゆさぶりを想定した。資料によるゆさぶりとしては、R. コールバーグが開発したモラルジレンマ学習が有名であり、日本でもすでに研究が進められ、多くの授業実践例や研究が報告されている。また、教師の発問によるゆさぶりについては、「教師の切り返しの発問」としていくつかの研究例がみられた。研究代表者が長期研修員として指導を引き受けた現職中学校教諭の研究は、本研究の方向性を具体的に示すものの1つであった。

(3) 「討議」とは、ドイツの哲学者揺るげん・ハーバーマスが彼の主著『コミュニケーション的行為の理論』において提示した概念であり、それは簡潔に述べれば、根拠を明示した話し合いにおいて、その根拠の妥当性を吟味し、よりよい意見を作り上げ合資していくことを意味する。ハーバーマスのコミュニケーション的行為理論を教育の領域で論じた論考としては、野平慎二の『ハーバーマスと教育』(2007)がある。道徳教育に限定すると、渡邊満(現在は岡山大学)が兵庫教育大学で現職教員らとともにおこなっていた研究が、理論研究としても、また実践研究としても、この研究領域の先導的な役割を担っていた。

(4) 研究代表者は、本研究の開始以前から、道徳教育を社会構成主義的な観点から考察する研究に着手し(上地 2005)、価値を単純に伝達しようとする授業方法論の問題点を

指摘する研究(上地 2007)を始めていた。後者については、日本道徳教育方法学会 2007年大会のシンポジウムにおいて、パネリストとして積極的に取り上げた。これらの研究に通底していたのが、学校における道徳教育はよりよい社会を構築していくために必要な社会規範をその構成員(教師、児童・生徒)が確認し、必要に応じて創造していくことだという確信であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、道徳教育において「ゆさぶり」と「討議」という2つの鍵概念の有効性を理論的・実践的に検討し、こうした工夫を導入することで、児童・生徒が主体的に道徳学習を展開する実践モデルを開発し、その意義と課題を理論的・実践的に明らかにすることであった。

3. 研究の方法

(1) 理論研究としては、文献研究を中心におこなった。とくに「討議」概念はすでに哲学や政治学の領域で注目されているため、その領域で展開されている議論に注意を払いながら、これを教育理論へと導入し、道徳授業を理論的に構築することをめざした。

(2) 道徳授業モデルの実践・検証に際しては、琉球大学教育学部附属小学校にも協力してもらい、おもに実践的な面から有益な指摘をいただいた。とりわけ、2009年度・2010年度は小学校1年生のクラスで授業実践をおこない、本研究が決して中学校や小学校高学年といった学年(発達段階)に到達していない子どもを対象にしても、十分に実践できることが示された。また、文部科学省から研究指定を受けた沖縄県浦添市立港川小学校の研究「共に学び合い豊かな心を育む道徳教育をめざして」に2年間(平成20・21年度)共同研究者として関わる中で、本研究の成果に関する実践的検討にご協力いただいた。

4. 研究成果

(1) 理論的な成果

モラルジレンマ授業では普段あまり発表をしない子どもたちも積極的に意見を言うので、教師・子ども双方にとって評価の高い授業であるといえる。だが、結論を出さずにオープンエンドで終わる授業の終末においては、「最終的にどうするべきか教えなくていいのか」とか、道徳は「なんでもあり」でいいのかといった批判や不安の声がしばしば向けられる。子どもたちにある価値について自由に考えさせ判断させると、その判断は確かに主体的な判断となるのだが、その判断がつねに正しいとはいえないし、第一、「正しさ」と無関係な道徳というものを肯定することはできないだろう。

ここから明らかとなるのは、道徳には、道徳的価値や判断について自由に考えることと、そうした判断や意見に対する道徳的正しさの双方が求められるということである。インカレーションに対する批判は、そこに子どもたちの自由な思考が欠如していることに向けられたものであった。それに対して、モラルジレンマ授業におけるオープンエンドという授業の終わり方に対して抱かれる不安は、その授業に道徳的正しさが不在だったことに起因しているのである。

この問題をもっとも先鋭化させたのがイマヌエル・カントの議論である。カントによれば、人間は理性的存在ではあるが、しかし神のように完全な理性的存在ではない。だから、自分の意志に従って行動してもそれが道徳的につねに善いとは限らないし、ある行為が道徳的に悪いことだと知っていてもそれをすることもある。それゆえに、人間が道徳的に振舞うためには善い（正しい）行為を強制する道徳に関する客観的法則が必要となる。だが、他方で、この客観的法則に従うことは人間の意志の自由を否定することにつながる。カントにとって道徳とは何よりも自律、すなわち自分で決定することを大前提としており、他者の意見や権威に従った判断は他律として排除された。

この難問を解決する「妙案」としてカントが発見したのが「立法」という考え方であっ

た。自分で決めたルールに従えば、「ルールに従わされる」という他律ではなくなる。その自分の決めたルールが客観的に正しいルールとつねに合致していれば、私は間違ふことなくつねに正しい行為を自分の意志で選択しておこなうことができる。

ただし、こうしたカントの考え方にも次のような欠点がある。それは、客観的法則（客観的な正しさ）が存在していると想定してしまう点と、その考えられた正しさが他者に当てはまるかどうかを自分だけで考えてしまうという欠点である。カントのこの欠点を補えるのが、ハーバーマスのコミュニケーション的行為に基づく「討議」（ディスクール）という考え方である。

真理が「コミュニケーション当事者の合意によって成り立つ」とするハーバーマスのディスクール倫理学は、真理の合意説に立っている。合意によって真理が成立するということは、絶対的な真理の存在が否定され、そこで合意されたことも決して絶対的なものとはならない。いったん合意されたことでもその妥当性に疑問が生じた場合、何度でも討議において議論され、妥当性を追求する中で新しい合意が形成される。合意された正しさは確かに現段階では妥当性を有するが、しかしそれが将来絶対に覆されないという保証はない。真理の合意説は、真理のこうした不確実性という特質を帯びている。それは可謬主義と呼ばれる立場であり、ハーバーマスのコミュニケーション的行為理論において、そこでなされる主張は可謬的なものなのである。

（2）今後の理論的課題

今後の理論的研究課題として、①徳論や共同体主義が主張する、個人的な徳（価値観）や共同体の文化や伝統を、本研究でどのように取り扱うか、②学びを「実践への参加による学び」と捉える論点と、認知的学びが主となっている本研究の道徳学習の関連について、前者のもつ利点をどのように取り込むことができるのか、③合意をめざすことと社会構成主義との論理的整合性について、どのように調整することができるのか、という3点

が明らかとなった。

(3)「ゆさぶり」について

資料によるゆさぶりと、教師の発問によるゆさぶりをを用いた授業では、子どもたちの発言が活発になり、与えられた課題に真剣に取り組む姿勢が見られた。しかし、発問によって子どもたちをゆさぶることは、学校教師にとって多少の困難を伴うものであった。その困難性の原因として次のことが浮かび上がった。①子どもたちの思考や授業展開を意識してゆさぶることが重要である。そうでなければ、子どもの発言の単なる否定や授業の混乱に終わってしまう。②そのためには、教師がその授業で子どもたちに何を考えさせたいのかという授業のねらいをこれまで以上に明確に授業に臨む必要がある。ゆさぶりは常に子どもたちの思考を深め、授業のねらいを意識しておこなわれなければならない。ただし、このことは、教師の望む答えを子どもたちに言わせるためにおこなうこととは根本的に異なる。

(4)「討議」について

実際の授業場面において、討議の実施もまた容易でないことが改めて確認された。子どもたちは自分の意見を述べることができても、異なる意見をその根拠に基づいて吟味し、意見を収斂させていくという活動は難しい。この点については、最終年度にさらに考察を深め、「討議」へと至る話し合いの深化を次のように整理した。①自分の意見を素直に言えるようにする段階。発言することへの抵抗感を取り除く。②根拠に基づいて自分の意見を述べるようにする段階。自分の意見を何となく話したり、感覚的に意見を述べている子どもに対する指導が必要。③話し合いの質を高める段階。子どもたちが提示する論点は様々で、それを発表するだけでは論点や意見の羅列で終わってしまう。そうならないためにも、教師が論点の整理をおこなったり、授業のねらいとも照らして、どのような論点で議論を深めていくか取捨選択をおこない、子どもたちの意見を材料にして議論を構築していく視点と技能が必要となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 上地完治 『『ゆさぶり』と『討議』による道徳授業の意義—自由に考えることと道徳的正しさのパラドクス—』『琉球大学教育学部紀要』第79集(2011年10月刊行予定)。(査読なし)

[学会発表] (計1件)

- ① 上地完治 『『ゆさぶり』と『討議』による道徳授業の意義—自由に考えることと道徳的正しさのパラドクス—』日本教育学会第69回大会(於:広島大学)2010年8月22日。

[その他]

本研究の成果は、公立小・中学校の校内研修や教員免許状更新講習(選択科目「道徳授業を創る」)で適宜紹介している。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上地 完治 (UECHI KANJI)
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号: 50304374